

機械の限界とモラル

湯川 秀樹著 創造的人間



湯川 秀樹氏

今世紀の最初の四半世紀あまりにおける物理学の大きな発展、発見は、科学革命の時代とよばれる十七世紀のころのものである。しかし、最近の三半世紀には、周期的な進歩はなにもみえず、科学的な進歩は停滞を来している。これは、物理学は進化を来しているのではない。

「これは、この本の著者湯川教授がいつも憂慮されていることである。著者は、著者が人間の創造性の問題にたいして興味をいだくにいたった直接の動機になつてゐることに思われる。しかし、もちろん、動機はそれだけではない。電

子計算機のきつな機械の出現によつて、人間の本性をいかに考察してみることが要求されている。著者は、教育の原理についての反省が、教育の原理についての反省が、重大化しているといふ時代的背景も、おそろしく重要な動機となつてゐるであらう。もちろん、これらはたがいに関連する問題でもある。

本書は著者がまことに数年前のあいだに、人間の創造性の問題に關係して書いた論議をまとめたものであるが、著者の人間観や科学論が随所で述べられてゐる点でも、意義をかくまはなかつた。

人間は開かれた世界に生きてゐると、著者はいう。電子計算機はあたえられた前提から論議（えんえき）的論議をほどこすことができるだけだが、人間はまったく新たな知識を獲得する可能性をいつわ

るものではない。機械の限界が、もつものである。機械の限界が、ここにあるかどうかが、著者は多面的に論じてゐる。機械力、想像力、直観といったものが、創造性の土台になる人間的特質として、あげられてゐる。創造性に関する教育の面でも、うねん深さの意義を強調し、また、日増しに身につけていける能力を重視してゐるのは、教育者として大切な意見である。さらに、すすんでいく方向を正す目的の重要性を創造性とあわせて説いてゐる。

(筑摩書房・四八〇円)

c073-001-038